

日本語の自動詞化辞と他動詞化辞

加藤弘(カトウ ヒロム)

東北大学留学生センター

katoh@intcul.tohoku.ac.jp

1.はじめに

本研究では自動化辞「RAR・RE」および他動化辞「SAS・SE」を設定する。これによって、まず、自動詞と他動詞の形態的対応関係を6種類に分類する。つぎに、自動詞・他動詞・受動構文・使役構文の相互の関係を定式化する。また、東北方言でみられる非標準的な他動詞形・受動使役構文がこれらの接辞によって定式化できることを示す。

1.1結合規則

形態素どうしの結合部分の形をととのえるために、次の規則を設定する。

(1)「形態素どうしを結合した際に結合部分で隣り合う音がともに子音であれば、うしろの子音をけずる。」

たとえば、終止形形態素を「-ru」として、動詞の語幹を

母音語幹(一段動詞): mi, tabe,....

子音語幹(5段階動詞): aruk, das, yom,....

とする。すると終止形は以下のように形成される。

(2a)mi + ru → そのまま → miru

(2b)aruk + ru → rをけずる → aruku

2.形態的対応の類型

自動化辞「RAR・RE」および他動化辞「SAS・SE」をてがかりに自他動詞の対を分類する。

2.1

(3) [語幹] + ru → [他動詞]

karam+RAR+ru → karamaru

[他動詞] + RAR → [自動詞]

karam+ru → karamu

[例]

からむ/からまる(絡) さす/ささる(刺)、つかむ/つかまる(掴)、つぐ/つながら(繋)、ふさぐ/ふさが(塞)、またぐ/またがる(跨)

2.2

(4) [語幹] + ru → [他動詞]

ur+ru → uru

[他動詞] + RE+ ru → [自動詞]

ur+RE+ ru → ureru

[例]

うる/うる(売) 1、おれる/おる(折) 2、かける/かく(欠)、きれる/きる(切)、けずれる/けずる(削)、さける/さく(裂)、さばける/さばく(捌)、しれる/しる(知)、すれる/する(擦)、ずれる/ずる、たける/たく(炊)、つれる/つる(釣)、とける/とく(溶・解)、とれる/とる、ぬける/ぬく、ぬげる/ぬぐ、はげる/はぐ(剥)、はじける/はじく(弾)、ひける/ひける(引)、ほどける/ほどく、ほれる/ほる(掘)、むける/むく(剥)

もめる/もむ(揉)、やぶける/やぶく(破)、よじれる/よじる(捩)、よれる/よる(燃)、われる/わる(割)

2.3

(5) [語幹] + ru → [自動詞]

uk+ru → uku

[自動詞] + SAS+ ru → [他動詞]

uk+SAS+ ru → ukasu

[例]

うく/うかす(浮)、うごく/うごかす(動)、かわく/かわかす(乾)、ちる/ちらす(散)、てる/てらす(照)、とぶ/とばす(飛)、ふく/ふかす(吹)へる/へらす(減)、わく/わかす(沸)

2.4

(6) [語幹] + ru → [自動詞]

itam+ru → itamu

[自動詞] + SE+ ru → [他動詞]

itam+SE+ru → itameru

[例]

いたむ/いためる(傷・痛)、おちつく/おちつける、かたづく/かたづける(片付)、からむ/からめる(絡)、かがむ/かがめる(屈)、こごむ/こごめる(屈)、しずむ/しずめる(沈)、くるしむ/くるしめる、そだつ/そだてる(育)、そむく/そむける(背)、たつ/たてる(立・建)、ちぢむ/ちぢまる(縮)、つなぐ/つなげる(繋)、とどく/とどける(届)、どく/どける(退)、にたつ/にたてる(煮立)、のく/のける(退)、のる/のせる、まちがう/まちがえる(間違)、むく/むける(向)、やむ/やめる(止)、ゆるむ/ゆるめる(弛)、よる/よせる、きる/きせる、のる/のせる、みる/みせる

2.5

(7) [語幹] + RAR + ru → [自動詞]

ag+RAR+ru → agaru

[語幹] + SE+ ru → [他動詞]

ag+SE+ru → ageru

[例]

あがる/あげる(上・挙・揚)、あたる/あてる(当)、あたたまる/あたためる、あつまる/あつめる、あずかる/あずける、うかる/うける、うわる/うえる(植)、おさまる/おさめる(収・治)、おわる/おえる、かかる/かける(掛)、かさなる/かさねる、かたまる/かためる、かぶさる/かぶせる、かわる/かえる、くわる/くわえる、さがる/さげる、さだまる/さだめる(定)、しまる/しめる(閉・締)、すわる/すえる(座・据)、せまる/せめる(責・迫)、そなわる/そなえる、そまる/そめる、たかまる/たかめる、たすかる/たすける、たまる/ためる(貯)、つとまる/つとめる、つながる/つなげる、つまる/つめる(詰)、とまる/とめる、はじまる/はじめる、はまる/はめる、ひろがる/ひろげる、ひろまる/ひろめる、まがる/まげる、まか

る/まける、まざる/まぜる、もうかる/もうける、につまる/につめる、のっかる/のっける (乗・載)、ゆだる/ゆでる

2.6

(8) [語幹] + SAS → [自動詞]

ak + SAS + ru → akasu

[語幹] + RE → [他動詞]

ak + RE + ru → akeru

[例]

あける/あかす (明)、あれる/あらす、おくれる/おくらす、かける/かかす (欠)、かれる/からす、こえる/こやす (肥)、こげる/こがす、ころげる/ころがる、さめる/さます (醒・冷)、たえる/たやす (絶)、でる/だす、にげる/にがす、ぬける/ぬかす、ぬれる/ぬらす、はてる/はたす、はえる/はやす (生)、はれる/はらす、ひえる/ひやす、ふえる/ふやす、ふける/ふかす、ふやける/ふやかす、もえる/もやす³

3.1 受動構文と自動化辞 RAR・RE

いわゆる受動の助動詞「れる・られる」は、「RAR+RE」として解析することができる。たとえば、「たべる、ぬすむ」を例にすると、つぎの構成過程がみられる。

(9) 母音語幹動詞: tabe +RAR+RE+ru

→ tabe +RAR+RE+ru → taberareru

(10) 子音語幹動詞: nusum+RAR+RE+ru

→ nusum+RAR+RE+ru → nusumareru

3.2 受動構文の縮約形

3.2.1 縮約形 a

「みつかる/みつける」(2.5参照)の対は自他の対応でないので、破格な対にみえるが、実は「みつかる」は受動構文「みつけられる」の縮約形である。

(11a) おかあさんが子どものつまみぐいをみつける。

(能動構文)

(11b) mituk+SE+ru → mituk+SE+ru → mitukeru

(12a) つまみぐいをおかあさんにみつけれられる。

(間接受動構文の標準形)

(12b) mituk+SE+RAR+RE+ru → mituk+SE+RAR+RE+ru
→ mitukerareru

(13) つまみぐいをおかあさんにみつかる。

(間接受動構文の縮約形)

(14a) つまみぐいをおかあさんにみつかる。

(直接受動構文の縮約形)

(14b) mituk+SE+RAR+RE+ru

→ mituk+SE+RAR+RE+ru → mituk+RAR+ +ru

→ mitukaru

つまり本来あった「SE、RE」が省略されることによって、形成されたのである。

「みつかる」のほか「あずかる、いいつかる、さずかる、ことづかる」などもそれぞれ「あずける、いいつける(言付)、さずける、ことづける」にもとづく受動構文の縮約形である。もとの動詞とくらべると「もの」の移動方向が逆になっているのは受動変換をした結果である。

3.2.2 縮約形 b

「臨時国会開かる」のような新聞の見出しなどにつかわれる、古風な表現がある。これも受動表現「ひらかれる」の縮約形である。ここでは自動化辞「RE」が省略されている。

(15) hirak+RAR+RE+ru → hirak+RAR+ +ru

→ hirak+RAR+ +ru → hirakaru

3.3 自動詞と自発・受動表現

自動詞は自発・受動表現にきわめてちかい。そのため自動詞が、対応する他動詞の自発・受動表現の代用をすることがある。

2.5類の「おさまる(収)、もうかる、つながる、つまる、ゆだる」などは自発的な意味をもっている。たとえば「引越しの荷物がなんとか部屋に収まった。」「今期は意外にもうかった。」などの例は、主体の努力をこえて事態の方が勝手に推移したという口ぶりである。

また「みつかる」も自発的用法をもっている。たとえば、次の例のように自己を動作主体とすると、自発用法になる。

(16) (ボクには) ボールがなかなかみつからない。

(17) 地図でバチカン市がみつかった人は手をあげて。

[地理の授業で]

自動詞がすべて自発表現や受動表現になるのではない。「生きる、泳ぐ、花が咲く」など、自動詞であっても、自発や受動の意味のない動詞はたくさんある。上にあげた「おさまる他」が自発用法をもちうるのは、「RAR」をふくんでいるからである。

自然現象でも「雨がふる、風がふく」には、自発的ニュアンスがないが、「夜があける」には、オノツカラ事態が変化したというひびきを感じられる。

このほか「(数式の) 答えがもとまったら……」「どうも心ははれない」といった表現も自発用法である。「もとまる」は「もとむ」に「RAR」をつけたものである。「はれる」は「RE」をふくんでいる (2.6参照)

4.1 使役構文と他動化辞 SAS・SE

いわゆる使役の助動詞「せる・させる」は、「SAS+SE」として解析することができる。たとえば、「(窓を) しめる、(作文を) かく」を例にすると、つぎの構成過程がみられる。

(18) 母音語幹動詞: sime+SAS+SE+ru

→ sime+SAS+SE+ru → simesaseru

(19) 子音語幹動詞: kak+SAS+SE+ru

→ kak+SAS+SE+ru → kakaseru

4.2 使役構文の縮約形

4.2.1 縮約形 a

たとえば「あるく」にもとづいて構成された使役受け身構文には「あるかせられる」という形式と「あるかされる」という短い形式がある。それぞれの構成過程は次のようになっている。

(20) aruk+SAS+SE+RAR+RE+ru

→ aruk+SAS+RE+RAR+RE+ru → arukaserareru

(21) aruk+SAS+ +RAR+RE+ru

→ aruk+SAS+ +~~R~~AR+~~R~~E+ru → arukasareru

つまり、短い形式では使役表現のうちの他動化辞「SE」が省略されている。この「SE」を省略した使役表現は単独でもつかわれる。たとえば、次をくらべてみよう。

(22)電話をつかわせてください。(本来の使役形)

(23)電話をつかわしてください。(縮約形)

意味はまったく同じだが、縮約形の方にややぞんざいな、はすっぱな印象をもつ人が多いのではないか。それは、まさに手抜きをした形式だからである。

不用意に「ちょっと寝させてください。」などといってしまうことがある。標準的には、他動詞「ねかせる」をもちいて「寝かせてください。」というべきところである。この「ねかす」も「ねる」の使役形を縮約したものである。その構成過程は次のようになる。

(24)ne+SAS+SE+ru → ne+SAS+ +ru → ne+SAS+ +~~R~~u
→ nesasu

この縮約形は、2.3類の対と同じ構成過程によっているの、2.3類の他動詞と類似した機能をはたし、両者の区別はみおとされがちである。が、次の点で相違する。

(25)あまるーあまらせるーあまらす

(26)うごくーうごかせるーうごかす

「あまらせる」は使役表現だが、「うごかせる」は「うごかすことができる」の意味であって使役表現ではない。というわけで次のものは2.3類ではなくて使役表現の縮約形である。「あまらす、あわす、いそがす、うつらす、かえらす(帰)、きかす(利)、しめらす、しよわす(背負)、すます(済)、そらす(逸)、もどらす、におわす、よわす(酔)」など。

4.2.1.2縮約形 b

人を目的語とする表現「人をくるしめる」「生徒を校庭にならべる」などは「くるしませる」、「ならませる」にもとづいて形成された縮約形である。その構成過程は以下のようになる。つまり他動化辞「SAS」が省略される。

(27)kurusim+SAS+SE+ru → kurusim+ +SE+ru

→ kurusim+~~S~~E+ru → kurusimeru

(28)narab+SAS+SE+ru → narab+ +SE+ru

→ narab+~~S~~E+ru → naraberu

4.3他動詞と使役表現

他動詞は使役表現にきわめてちかい。そのため他動詞が、対応する自動詞の使役表現の代用をすることがある。

(29a)荷物の網棚にのせる。

(29b)馬を運搬車にのせる。

(29c)友達を車にのせる。

(30a)釣った魚をにがしてやる。

(30b)小鳥をにがしてしまった。

「友達を車にのらせる。釣った魚をにげさせてやる。」のような使役表現は、原理的に可能であるが、あまりつかわれない。そのかわりに他動詞形「のせる、にがす」がもちいられる。この類の他動詞には以下のものがある。

【例】(寝ている人を)起こす、(敵艦を)しずめる、(生徒を)ならべる、(大声をだして客を)よせる、(客席を)わかす

5.自動化と他動化の交点

ここでは、同一の語が受動的な用法と他動的・使役的な用法をもっている場合をとりあげる。これらも本稿で設定した接辞をもちいて定式化できる。

5.1「いためる」

「いためる」は、二つの解釈が可能である。「バスの事故で頸をいためた。」では被害をうけたので受動的な意味をあらわしている。「飲み過ぎて肝臓をいためた。」では自分でしたこのなので再帰他動的な意味をあらわしている。これは、つぎのような語構成過程のちがいとして説明できる。

(31)itam+RE+ru → itam+~~R~~E+ru → itameru

(32)itam+SE+ru → itam+~~S~~E+ru → itameru

5.2「受ける」

「受ける」も二つの解釈が可能である。たとえば「被害をうけた。ジョークが観客にうけた。」では、受動的意味にとらえて「uk-RE-ru」という分析が可能である。いっぽうたとえば「ボールをうける。大学を受ける。」では、能動の意味にとって「uk-SE-ru」という分析が可能である。

5.3「受かる」

「受かる」も二つの解釈が可能である。受動の意味にとるなら「uk-RAR-ru」という分析が可能である。たとえば「滑り止め(第二志望)にうかる。」という場合である。能動の意味にとるなら「uk-SAS-ru」という分析が可能である。たとえば「志望校にうかる。」という場合である。

5.4「つかまる」

「つかまる」は、すくなくとも二つの用法をもっている。「警察につかまる」では「つかまえられる」という受動的な意味をあらわし、「手すりにつかまる」では「もたれかかる、すがりつく」といった再帰他動的意味をあらわす。これは、つぎのような語構成過程のちがいとして説明できる。

(33)tukam+RAR+ru → tukam+~~R~~AR+~~R~~u → tukamaru

(≒警察に捕マエラレル)

(34)tukam+SAS+ru → tukam+~~S~~A+ru → tukamaru

(≒自分自身ヲ手スリニ掴マラセル)

5.5「あたる」

「あたる」も、すくなくとも二つの用法をもっている。「ボールにあたる」では受動的な意味をあらわし、「火にあたる」では他動的な意味をあらわす。これは、つぎのような語構成過程のちがいとして説明できる。

(35)at+RAR+ru → at+~~R~~AR+~~R~~u → ataru

(≒ボールニアタラレル)

(36)at+SAS+ru → at+~~S~~A+ru → ataru

(≒自分自身ヲ火ニアタラセル)

6.いくつかの方言形

6.1「ねせる」

「寝る」に対応して標準的な「ねかせる」にくわえて方言形に「ねせる」がある。この語形はつぎの構成過程によって説明できる。

(37) $ne+ru \rightarrow ne+SE+ru \rightarrow neseru$

(=寝ルヨウニサセル)

これは標準語における「見る/見せる」「着る/着せる」の対(2.4参照)と同じ構成過程によるものであるが、「ねせる」は標準語に偶然に欠落している。

6.2「のまさる」

東北地方の方言に「苦い薬をのまさった(=飲マセラレタ)」のような語形がある。この「のまさる」はつぎの構成過程によって説明できる。

(38) $nom+ru \rightarrow nom+SAS+RAR+ru$

$\rightarrow nom+SAS+RE+ru \rightarrow nomasaru$

SAS, RARはそれぞれ使役、受動の意味をになっているので、これらがつけくわわることによって「飲ませられる」という使役受け身の意味がしめされることになる。

他に「書かざる、押さざる、撒かざる(ブチマケル)、ちらかざる、まかさってある(ヒックリカエル)」なども同じ構成過程によっている。

なお浅田次郎「鉄道員(ぼっぼや)」(1997)には「はあ……なんか俺、見てて泣かざるもね……」というセリフが出てくるが、この舞台は北海道である。この「泣かざる」も同様のものである。

ところで標準語の「泣ける」は「 $nak+RE+ru$ 」によって形成された、自発表現である。

7.おわりに

自動化辞「RAR・RE」および他動化辞「SAS・SE」を設定することによって、日本語のヴォイス・イズにかかわるさまざまな現象が分析できた。特に助動詞「られる、させる」によって構成される受動構文、使役構文と語彙的・形態的な自動詞文、他動詞文が本来的に同質のものだということがわかった。

[註]

1: 例語の自他の対は、本稿の中ですべて自動詞/他動詞の順でしめす。

2: 例語は平仮名でしめし、わかりにくい場合には漢字をカッコにいれてそえた。

3: 「 $koyeru$, $hiyeru$, $moyeru$ 」などの ye はヤ行の工段なので、「エ」となる。

[参考文献]

- 天野みどり 1987 「日本語文における<再帰性>について」『日本語と日本文学』10; 1-9. 筑波大学国語国文学会
井上和子 1976 『変形文法と日本語(下)』大修館書店
奥津敬一郎 1967 「自動化・他動化および両極化転成」『国語学』70; 46-75. 国語学会
清瀬義三郎則府 1989 『日本語文法新論』桜楓社

佐久間鼎 1957 『現代日本語の表現と語法』

恒星社厚生閣

沼田善子 1989 「日本語動詞 自他の意味的対応(1) —多義語における対応の欠落から—」『研究報告集』10; 193-215. 国立国語研究所

早津恵美子 1987 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6; 79-109. 京都大学言語学研究会

早津恵美子 1989a 「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』16-8; 353-364. 計量国語学会

早津恵美子 1989b 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて—意味的な特徴を中心に—」『言語研究』95; 231-256. 言語学会

早津恵美子 1990 「有対他動詞の受身表現について」『日本語学』9-5; 67-83. 明治書院

村木新次郎 1986 「ヴォイスの輪郭」『国文学解釈と鑑賞』51-1; 64-73. 至文堂

Teramura, Hideo 1968 A synchronic study of spontaneous voice in Japanese 『大阪外国語大学学報』18; 109-130